

国際交流事後活動ニュース

# MACRO COSM

◎特集 「国際青年育成交流」事業(招へい)  
討議セッション

マクロコズム 2003.9



vol. 54

財青少年国際交流推進センター

## 国際青年交流会議（2003年7月18日）



◀ レセプションにて外国青年と懇談される  
皇太子同妃両殿下

「グローバリゼーションと共生」  
をテーマに熱心に講演されている

▼ 川勝平太氏



レセプションにて歓迎の挨拶をする  
福田内閣官房長官



「国際青年交流会議」は、皇太子同妃両殿下の御成婚を記念して、平成6年度より始められた「国際青年育成交流」事業の外国青年招へい日程の一環として開催されるプログラムで、同事業に参加する日本派遣青年と外国招へい青年など約300人が一堂に会しました。開会式の後、国際日本文化研究センター教授の川勝平太氏による「グローバリゼーションと共生」と題しての基調講演、その後にグループ討論が行われ、夜には、皇太子同妃両殿下の行啓を仰ぎレセプションが催され、和やかな懇談の場が持たれました。内閣府大臣政務官への表敬訪問、課題別視察などの東京プログラムの後、4府県（滋賀県、京都府、大阪府、鳥取県）に分かれてのホームステイを含めた地方プログラム、最後に東京に戻り、招へい事業のまとめとして今年から開催する「討議セッション」に参加して、7月14日からの23日間にわたるプログラムを終了し8月3日に帰国しました。

## 「国際青年育成交流」事業（招へい）

### 討議セッション（7月29日～8月2日）

「国際青年育成交流」事業（招へい）の最後に、日本青年との意見交換を目的として今年度から始まったディスカッション・プログラム。6コースの分野が設定され、参加者は、選択した希望コースによって分けられました。（詳細は、本文P.5～P.10参照）

#### 環境コース



▲ 牛久自然観察の森

#### 情報コース



▲ テレビ朝日

#### 国際協力コース



▲ JICA（国際協力事業団）広尾訓練研修センター

#### 教育コース



▲ 特定非営利活動法人「ばれっと」



知的障害者の方たちとの交流

#### ボランティア活動コース

#### 伝統文化コース

裏千家の指導で茶道体験



討議セッション

(コース毎のグループディスカッション)



▲ 国際協力コース



▲ 教育コース

▼ 環境コース



▼ 教育コース



(全体会での発表)



フェアウエルパーティにて外国青年から感謝の言葉を受ける山本内閣府政策統括官

(フェアウエルパーティ)

(修了式)



外国青年に「国際青年育成交流」事業の、日本参加青年には「討議セッション」への修了証の授与が行われました

# 第1回「討議セッション」を開催して ～世界の人と英語で語ってみませんか～

「討議セッション」は、国際青年育成交流事業（外国青年招へい）のプログラムの一環として、世界11か国から招へいた外国青年と、国際的な問題に関心の深い日本青年とが、テーマごとのグループに分かれて率直な意見交換を行うことにより、それぞれのテーマについて、日本独自の考え方、あるいは、全世界で通用する考え方がどのようなものかという認識を深め、国際的対応力を身につける機会とすることを目指して、本年度から開催されることになったものです。

第1回となる今年は、7月29日から8月2日の4泊5日の期間で、独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センターをメイン会場として実施されました。コースは、教育、環境、情報、国際協力、伝統文化、ボランティア活動の6分野を取り上げ、専門分野の知識をお持ちの方をそれぞれのコースのアドバイザーとして迎えてプログラ

ム作りに臨みました。実行委員会は、各コース担当として、アドバイザー、準備及び当日のプログラム進行をするコーディネーター、そのサポートをするコース担当実行委員、そして全体の運営や各イベントを担当するイベント担当実行委員という役割分担で、約40名により構成されました。

## 〈アドバイザー〉

教 育：渋谷英章氏（東京学芸大学教育学部教授）

環 境：広瀬敏通氏（ホールアース自然学校代表）

情 報：川上和久氏（明治学院大学法学部教授）

国際協力：長瀬 修氏（東京大学助教授）

伝統文化：江川京子氏（裏千家）

ボランティア活動：佐藤 陽氏（<sup>（</sup>十字学学園女子  
大学講師）

参加者は、日本全国から募集された60名（3名の外国青年を含む）の国内参加青年と「国際青年育成交流」事業の招へい外国青年11か国（ドミ

## 主 要 内 容

第1回「討議セッション」を開催して	OBOG ネットワークを活かして……………16～17
「討議セッション」実行委員会より ……5～10	都道府県IYEOからのお知らせ……………17
第31回「青少年国際理解セミナー」 ……11～15	日本青年国際交流機構
～討議とワークショップ～	第19回全国大会へのご案内……………18～20
御蔵島から……………15～16	

### 〈表紙の説明〉

「国際青年育成交流」事業  
国際青年交流会議  
レセプションより

## 「国際青年育成交流」事業

ニカ共和国、モロッコ、ミャンマー、ルーマニア、トルコ、キューバ、ジョルダン、リトアニア、セネガル、スウェーデン、ウルグアイ)からの98名に実行委員を加えて、約200名の規模で実施されました。

全国から集まってくれた国内参加青年は、元気いっぱい、短い日程を有意義に過ごそうと意欲にあふれていました。外国青年は、3週間の日程の最終期間ということで最初は少々疲れ気味の様

子でしたが、パワーのある彼らのこと、すぐに打ち解けていました。11か国の外国参加青年の間でも、英語力の差もあり、当初ディスカッションの進行について工夫をするべきとのことで、コースによっては様々な配慮がされたようでしたが、当初心配していたほどの差はでなかったようでした。今回は、速報的に概要をお伝えしましたが、参加者のアンケート内容など評価を含めて、再度御報告させていただきます。

### 〔プログラム内容〕

テーマ別に分かれたグループごとのディスカッションを中心として、それぞれの分野の知識を深めるとともに、異文化を理解してもらうことを目的として、プログラムを通してディスカッションの進め方やコミュニケーションの技術、発表方法などを身につけるられるような内容にすることを目指しました。

	日 程
7月29日(火)	日本参加青年オリエンテーション／ディスカッション講座／ディスカッション準備
7月30日(水)	開会式／オープニング・ランチ・レセプション／アイスブレイキング コース別ディスカッション／文化交流会
7月31日(木)	コース別活動(ディスカッションに加えてテーマに沿った訪問先の設定含む)
8月1日(金)	コース別活動／発表会準備／フェアウエル・レセプション
8月2日(土)	発表会／修了式

#### ▼ ミュージック・カフェと題して文化交流会



## 「討議セッション」実行委員会より

## 討議セッションにアドバイザーとして参加して



▲ 情報コースメンバー勢ぞろい。筆者2列目右端

「国際青年育成交流」事業（招へい）の日本滞在最後の期間に、まとめのプログラムとして、各国の招へい青年が特定のテーマについて日本人青年も交えてディスカッションするという「討議セッション」を始めるとのことで、内閣府から依頼され「情報コース」のアドバイザーをお引き受けしたのは、すでに年度が変わった4月に入ってからだった。

テーマを、各国にとって、ある程度グローバルな課題である「イラク戦争報道」に定め、コーディネーター、実行委員が決まって動き始めたのは、5月も半ばになっていた。

慌しいスケジュールではあったが、コーディネーター、実行委員は、わざわざ私の研究室にまで来てくれてプログラムの骨格を詰めた。イラク戦争

明治学院大学教授 川上 和久

（「討議セッション」情報コースアドバイザー）

報道を通して、日本のメディア報道の特質を知ってもらおうと同時に、同じ事象が各国メディアによって異なった伝わり方をしていることを、少なくともお互いに理解してもらうこと、それを議論の出発点にしたかった。

コーディネーターの松井さん、松瀬さんには、それをもとに、プログラムの詳細にわたって進行を考えてもらった。メーリングリストを活用して日本人参加青年同士の交流を図りつつ、事前勉強会まで行った。基調講演の報道番組の英訳を実行委員の酒井さんに手伝っていただいたり、短い準備期間ながら、コーディネーターと実行委員は本当に頑張ってくれた。

「情報コース」は、課題別視察で読売新聞東京本社を訪問し、バグダッド特派員だった相原記者の話などを聞き、「討議セッション」では、テレビ朝日を訪ねて、武隈外報部長から、イラク戦争開戦当日の報道の工夫などについて話を伺い、各国のイラク戦争報道についても情報を共有して、メディアのあり方について、かなり突っ込んだディスカッションをすることができた。

「討議セッション」は、今年度初めての試みだが、コーディネーター、実行委員、日本参加青年のそれぞれの役割分担が噛み合うことで、「また参加したいな」と思うようなプログラムを創り上

げることができると思う。私自身、仕事で自分が担当した基調講演や訪問、討議以外の交流にあまり参加できなかったのは残念だが、それぞれが自分の持ち味を出しながら頑張ってくれたんだなと

感謝の気持ちでいっぱいだ。コーディネーターはじめスタッフの皆さん、参加青年の皆さん、ありがとうございます、そして来年にこの気持ちを引き継いでいこう！

### 「討議セッション」という名の舞台

「討議セッション」教育コース・コーディネーター 奥平 文子  
(1995年デンマーク派遣、2001年ミャンマー派遣副団長)

「討議セッション」の前日。私は、演劇をやっていた頃の幕が上がる瞬間の緊張感やスリルと重ね合わせていました。と同時に、それまでの様々な準備風景が甦りました。試行錯誤のプログラム作りの日々。今年初めてのプログラムで前例のない面白さと危うさ。「討議セッション」は、一つの作品作りのようでした。基本的な台本はスタッフが決め、それに彩りを加えていくのは参加者の方達ですが、どのような作品に仕上がるかは当日まで分かりません。貴重な時間と空間を共有しながら、参加者一人一人が「参加した」と感じられるような、また、それぞれの持ち味を出し、意見を述べ易い安心した場作りがコーディネーターとして必要であると感じていました。

教育コース・アドバイザーの渋谷先生が出されたテーマは、『共に生きることを学ぶ』教育を考えること。「異なるひとびとを理解し、ともに協力して課題に取り組むためにはどのようなスキルや意識が求められるか。」先生の助言の下、どのように具体的な切り口や流れで参加者に提示するかが課題でした。導入のアクティビティを決め、ディスカッションの素地としてはERIC（国際理解教育センター）の参加型学習のワークショップ



▲ 教育コースメンバーと。筆者最前列左から2番目

体験及び障害者支援団体「ばれっと」代表谷口さんのお話と施設見学、そして共通体験の「振り返り」。その流れの上に、グループごとに教科書を用いながらの各国事情や教育体験の共有、テーマ別ディスカッション及び発表が行われました。最終日にコース全員が輪になって一人ずつ話をした時、皆が本当に一つになったと実感しました。渋谷先生、コーディネーターの粕野さん、実行委員の大塚さんと三好さん、推進センターの方々、そして主役の参加者の皆さんで作上げた舞台でした。その一つの脇役を演じられたことは、私にとっても大きな学びであり喜びでもありました。



## 「討議セッション」～伝統文化～

「討議セッション」伝統文化コース実行委員  
宮内 理恵

最後のディスカッションの後、参加青年の一人が“*This is the beginning, I will have a new life at my country.*”と発言したことが非常に印象深かったです。今回この「討議セッション」に参加する際、「伝統文化」というテーマがあることを新鮮に感じていました。それが単なる異文化交流を楽しむコースにはならず、各自が自力で4回のディスカッションの段階を踏んで考えを先へ進め“*We are the world*”という結論に実感として達したことにとても驚いています。

4回のディスカッションの骨組みを企画する際、スタッフはどこまでを誘導し、どこまで自由にすべきなのか考えながら参加していました。実際、ディスカッションごとにコーディネーターのまとめ方、次のディスカッションへの引き継ぎ方の手腕に感心しました。同時に、参加青年たちから企画したイベントの主旨を素直に汲み取りディスカッションに反映する力や、人には個々の意見を受け入れかつ話し合うことで発展させる力があることを発見したことが素晴らしい収穫でした。また参加青年の中でも時間を管理する人、話をまとめようと努力する人、概念的な話で熱くなりすぎたディスカッションを程よくクールダウンさせる人、ひたすら自分の話したいことを話す人などそれぞれの個性が上手くかみ合い、自力でディスカッションを進める推進力になっていたと思います。そんな参加青年たちの個性と積極性、集中力を持続させるためにも一人一人こまめに話を聞くように働

きかけることが、コーディネーターより時間と気持ちに余裕のある実行委員の仕事ではないかと感じていました。「こちらはあなたのことを気遣っている」というジェスチャーを示すだけで参加者に心のしこりがほぐれたように見える場面が幾度かありました。

正直言うと、始め実行委員という役割を雑用のようなものだと思って参加しました。そのためにセッションの企画や前準備に参加させていただいた時には、伝統文化を討議する上での目的をなかなか理解できなかったり、経験がないために参加青年の陥りがちなパターンに対する配慮を提案することができず、コーディネーターのサポート役が果たせないことが歯がゆかったです。実際のセッションでは、いつも笑顔でいることや話し方の簡潔さ、ソフトさを心がけるだけで、ちょっとしたことで参加青年の心をひくということを発見し、「話しやすいスタッフ」として底辺のお世話を自分の仕事に位置付けることで、少し落ち着いてスタッフとして取り組めるようになりました。今回は、ディスカッションごとの細かい目的は実行委員にはお楽しみということもあり、実行委員はどこまで「参加者」であり、どこまで「スタッフ」なのかなどを考えてしまい、積極的になりきれなかった部分が反省点です。またの機会があれば今回の経験を活かし、てきぱきと仕事を見つけていけるようにしたいです。

## 「討議セッション」イベント担当実行委員として

「討議セッション」実行委員（イベント担当） 小玉 裕之

（1999年「日本・韓国青年親善交流」日本派遣団員）

討議セッションにおいて、僕たちイベント担当スタッフの役割は、大きく分けて二つありました。一つは、プログラム中の様々なイベントを企画、運営すること、そしてもう一つは全体の運営の裏方として、事務局をサポートすることでした。

“討議”と銘打ったプログラムですが、内容のある討議をするには、まず皆でうち解けることが何よりも必要！ということで、僕たちイベントスタッフは様々な楽しいイベントを企画して臨みました。初日には初対面の参加青年、スタッフの皆が様々なアクティビティを通してお互いを知り合い、混ざり合い、二日目には海外青年も加わり皆でとことん語ったり、踊ったり、三日目、本格的に討議に入る頃には“仲間”として、様々な異なる意見を出し合い、真剣に討議ができたように思います。

「討議セッション」は今回が初めての試みであり、スタッフの皆もそれぞれ自分の仕事や学校を抱えながらの準備だったため、実際に始まってみるまで漠然と全体像を思い描いている状態でした。始まってみると、それぞれが中心になって企画したイベントの一つ一つが形になっていき、一日の終わりのミーティングでは、ヘトヘトになりながら、皆がお互いの働きとチームワークを心から誉め合い、イベントの成功が嬉しくて、楽しくてたまらない、そんな五日間でした。素敵なイベントを企画し、そして何より自分たちも素敵な時間を過ごしたイベントスタッフは、最高のメンバーだっ

たと思います。皆で外国青年の踊りのリズムに乗りながら業務をこなした“Music Café”の興奮は忘れられません。

「討議セッション」にスタッフとして参加させて戴いて、精一杯働き、心から楽しみ、多くの目標と自信を得ることができました。このモチベーションは、日常生活にも力を与えてくれます。ここで得た仲間、そして自分自身のこれからの期待したいと思います。



▲ イベント担当メンバー。筆者前列右から2番目



## 国際交流体験をどう活かすか？(PART II)

### ～講義とワークショップ～

講師：中野 民夫 氏

#### ワークショップの必須3条件

意義深い学びとか創造とか気づきが起こるためにワークショップの必須条件は3つあると思います。

1番目が「場づくり」。今日はこういう机や椅子が動かせるフラットな会場で、机を使ったり外したり、椅子だけになったり、いろんなことをやってきました。やはり自分たちの必要な形に場を作っていくということを常に心がける。今回は講義とワークショップをやりますということをチラシに書いて、来ていただく人にそういう気持ちでお越しいただき、ここに集まったときにどういう気持ちでそこに揃うかという、そこからもう「場作り」が始まっていると思います。そして具体的に椅子をどう並べるかという狭義の意味、両方含めて「場づくり」です。

次にプログラムです。短い限られた時間で、目的＝今回は「国際交流体験をどう活かすか？」ということでしたが、それを実現するためには場を預かるファシリテーターはそれなりに考えているわけです。よくプログラムを考えると、「起承転結」と考えます。今日、起の最初の導入と言う意味では、みんなここで立ってお互いに名前を呼び合うみたいなことをやりました。それも自分が呼ばれたい名前と呼ばれるという一言そのエ



ピソードを話してもらおうということで、全く知らない人が一順してくる間にずいぶん場が変わっていったと思います。

もう一つそれを深めて、そこでは自己紹介を始めると長くなってしまうので、何か影響を受けた世界の地域、関わりのある地域を選び6つの小グループに分かれて、地域別同好の志で思いを語り合うということで15分間持ちました。そこで何らかつながらりのある地域に影響を受けた人たちがもう1歩深く話し合えたのではないかと思います。これが導入でお互いを知り合うねらいでやっているわけです。

次に自分の印象深い国際交流体験を思い出してもらい、それを絵に描いてもらうということをや

## 第31回「青少年国際理解セミナー」

りました。短い時間でしたけれども、日常の意識で自分が知っていると思うものをパッと書く前に、ちょっと首肩ほぐしをしていたら、いつもとは違う音や匂いとかにも注意を向けていただいたりして、そういう自分な

りの体験というものを思い出していただいたわけです。時間的にそんなにとっていませんけれども、皆さんクレヨンを久しぶりに触ったのではないのでしょうか。何か本当にそれぞれが自分なりの大事なシーンを絵に描いているというのは美しい風景だなあと思いながら拝見してました。

その後また、相互インタビューということで、二人組になってお互いの経験や思い、それを引き出しあって聞きあってもらいました。このへんが「起承転」で自分の体験を深めたものをお互い話すという形で引き出しあい、そして描いていったわけです。

最後は他己紹介と相互コンサルテーションの輪という感じでそれを元にもっとその人がどう活かしていけるかというのを自分でも深め、人からもいろいろアドバイスをもらいました。最後は、「ワークショップってワイワイやって楽しくてよかった。」と終わってしまうことなく自分の日常に是非つなげていただきたい、そのための橋渡しの場も作りたいと思っていますので、大変シンプルな形でしたけれども、「〇〇は〇〇するぞ。」という決意を一言書いていただくという形で短いま



とめにさせていただきました。

真ん中に「国際交流体験をどう活かすか？」という今回の大きいテーマがあるんですけど、それに向けて「起承転結」ということでプログラムを考えてきたわけです。

ワークショップで大事なものは、場があって、プログラムがあって、ファシリテーターがいるということです。ファシリテーターをやっている間、多分僕は時間の1/10も話していないと思います。ほとんど皆さんが自分で考えたり書いたり、話しているという時間にお預けしているわけで、この仕掛け、つまり一人の先生が2時間話すという場ではなくて、皆さんがこうやっていろんなグループサイズに分かれながらいろんな自分の体験を元に考えていくという場の違いというのを感じていただけたらなあと思います。そういう意味でファシリテーターは縁の下の力持ちというか黒子で、参加している皆さんが主役の場というのがワークショップだと思います。

20ページ目はその場作り、さっき言ったことです。教室形式が良い場合もありますけれども、相互作用を起こそうと思うのであれば、もっともっ

と違った輪になって座るですとか、小グループに分けるといふことが必要になってくると思います。場に自分たちを合わせるのではなく、自分たちが必要な場を作りましょう。

1つずつの他己紹介のようなものは、アクティビティ、エクササイズ、ワーク、あるいは部分なので、モジュールと言ったりします。そういうものをどう組み合わせる限られた時間の中で「起承転結」を作るか。フルコースでいきなりデザートから出さない、メインディッシュから出さない、ある意味で人の緊張をほぐしながら、受け入れる準備を作りながら、次第に学びが深まっていくように、どうデザインするかというのがプログラムデザインになります。

ファシリテーターは、この1つのワークショップを旅だと思えばそのツアーガイドですし、航海ではある種ナビゲーターかもしれません。ファシリテーターは、アメリカでは職業的に確立しているので、企画する人は企画する人、ファシリテーターは直前に来てわかったと言ってその人の場だけを取り仕切る場合とがあるのですが、日本の場合は企画からずっと一緒に分けずに行う立場だと思います。

今社会のあちこちで、正解とか誰かが答えを持っているというわけではないことばかりなので、みんなが持っている知恵や経験を引き出しながらどうしたらいいんだろう、何ができるんだろうというのを編み上げていく重要な役割だと思います。

ワークショップという「場」の構造のまとめですが、プログラム、ファシリテーターがあって、参加・体験・相互作用という特徴が起こる。ワークショップの例えで僕が好きなのは、「ゆりかご」

という例えです、その中で人はすくすくと伸び伸びと成長したり、或いは脱皮して変容する＝トランスフォーメーションみたいなものが起こりやすくなる、それをお互いが作りあうということがあります。グループダイナミクス＝一人ではなかなかできないということをお互いがこうやって集うことでシナジー効果がでる。そしてどこかに正解があるわけではなくて、自分の体験とかを思い出しながら、考えながらやっていくことで、学び続ける組織を作る、誰かに答えを教えてもらうということではなくて自らが取り組むという主体性が集まる。そしてまた今デジタル時代で携帯とかE-mailで非常にコミュニケーションが便利になっていますが、一方で本当に生身の人間のコミュニケーションというのが大丈夫だろうかということも出てきています。ワークショップは非常に生身の人間のやりとりの場ですので、逆にこういう時代だからこそ益々必要になってくる気がします。

そしてまた人が同じような人間ばかりだったらワークショップは全然盛り上がりがないわけで、違った経験や違った感じ方、違った思いをしている人がいるということがすごく刺激になって創造性の元になります。そういう意味で多様性や違いを障害ではなく豊さととらえ直すことが出来るすごいチャンスだと思っています。それはちゃんと違いを聞こうという姿勢があったり、聞いてもらえるという安心感があるから出せるわけですけども、そういう多様性と共生への大きなヒントがあるのではないかなという気がします。そして何よりも最初にも言いましたが、積極的に関われば関わるほど何かおもしろくなって、自分事になってくる。当事者意識、オーナーシップ、主体性が育まれる

と思います。これは“どうせ世の中変わらないよ”という諦めがちな私たちですけれども、やはり身近なところから自分がちょっと関わることで場が動いていく、どんどんおもしろくなっていくということをもっともっと、そういう小さい成功体験を積み重ねていく必要があるのかなあと思っています。

こういうことを通して僕も随分いろんな影響を受けてきましたけれども、知恵も力も関係の中から生じるとよく思っています。アイデアとかビジョンとか方向性、解決策ももちろんですけれども、いろんな元気や勇気、やる気、力も随分その中でいただいているし、お互い刺激しあっているんだなと思います。

### ワークショップの限界と注意点 ～非日常の場であることを忘れずに～

ただ、ワークショップの限界と注意点として、ワークショップは非日常の場、ある特定の時空間を使って普段ではほっておけばなかなかやらないことをわざわざするわけですけれども、その「意義」と「限界」があると思います。

「意義」というのは、日常というのが非常に慌ただしくて表層的な時代なので、自分のことを丁寧に振り返ったり人にきちんと聞いてもらえる関係の中で話したりすることがあまりありません。だからこそ、こうやって二人組でちゃんと聞きあうとかというのが貴重になります。そういう安全な空間を作って、安心安全な場で人がイキイキとしだすというのがワークショップなのです。外へ出れば冷たい風は吹いているわけで、日常というものをどう味わい変革していくかというのが私た

ちの課題ですが、下手をするとワークショップ中毒といいますか、こっちが本当で向こうが偽者でそういうワークショップ的な場に戻りたいという思いがあまり強くなると、ある種の中毒になったりもします。大事なのはやはり日常です。日常でどうしていくかということがとても大事になると思います。

それと、人を素直な状態に持っていて何かを考えようという意味では、ある種のきわどさがあります。危ない洗脳との峻別というのを書いていますけれども、自分自身の感覚をはっきりさせていく、自分自身に返すということを非常に大事だと思っ  
ていまして、ある素直な自分が素直になったときに何かこう吹きこむというのがいいんです。国際交流はこう活かすべきです、と例えば僕とか言い始めると、それが非常に素直に入っていく状態の時にやってしまうと、良かれと思っても洗脳になるわけです。

主催者に悪意があるなしに関わらず、そういう状態で何か1つの答えを示すというのはまずいなあと思っていて、明らかな意図のある洗脳はもちろんですけれども、期せずしてそういうことというのは割と教えることが好きな日本の中では起こりうるのではないかと思っています。

あと、ワークショップはあっという間に時間が過ぎたという印象だと思うんですけれども、こういうふうに体験して分かち合っ、また次にふけてやっているとあっという間に時間が経ちます。情報を伝えるという意味では、講義よりずっと効率が悪いわけです。けれどもその中でそれは大事なことは、何事も静かにゆっくりと思うので、そういう情報伝達の効率は悪いけれども逆にある意

味では非常に効率が良い新しいスタイルだと思います。

### 「手段」であって「目的」ではない

ワークショップの応用に向けてということで、繰り返しになりますが、唯一の「正解」がない様々な難問に直面する時代にいろんな分野での応用が待たれていると思います。人が集って、本当にまともに生き延びていくためにどうしたらいいんだろう、何ができるんだろうと問いあうときに、そのやり方というのが必要だと思います。それはやはり人間にとって根源的な喜びを内包する楽しくためになる魅力的な方法＝誰かがずっと語り続けているとか教えるとかではなく、今後何か皆さんがやられるときは、ここではこういうことをワークショップと言っていますという説明かがないとなかなか混乱があるのかなあと思っています。そして主体的な参加意識というのは、今回のようにわざわざ年度末の忙しい日曜日に自分の意志で来られる方は非常に高いわけですが、そうではない場合はどうやってその意欲をちゃんと高めるか？

それは選択をしてもらうとか、なんらか動機付け＝事前に何かを書いてもらうとか、いろんなことが必要になります。

ファシリテーターというものは、存在と技術が大事なんですが、内輪でやるというのは日常的に付き合っている人に何かわざとらしい技を繰り出すようで、なかなか出来ないの、外の人、或いはお互い外同士の関係でやりあう。学校の先生なんかも担任がやるよりも他の人がやった方がいいなあと思っています。

そして何よりも、ワークショップは「手段」であって「目的」ではないので、ワークショップをやって何かいいことをやっているというふうには思いこまないで、今回であれば国際交流体験をもっと活かそうというそれぞれの皆さんの人生が答えですので、ワークショップというのはそのための一つの手段であるということ間違えないようにしたいと思っています。いずれにしてもワークショップというのは明るい兆しだと思うので、大切にしたいと思ってこういう場などを持たせていただいています。(終わり)

## ～御蔵島から～

三宅 智子

(第15回「世界青年の船」参加青年)

みなさん、こんにちは。第15回「世界青年の船」事業に参加した三宅智子です。今は御蔵島に住んでいます。御蔵島ってどこ？と思われる方がいますよね。私も、1年前、ちょうど「世界青年の船」に乗っていたときには知る由もありませんでした。御蔵島は、三宅島の南に位置しています。三宅島噴火前は貨物も人も全て三宅島経由でした

が、現在は東京から直通で8時間で来ることができます。原生林が今なお残る自然あふれる島であり、現在は、教育・環境にも力を入れています。住んでみて実感したことが、この自然を残すために島民の方々が日々努力されているということです。正直言って、とても不便です。貨物船は週2回で、そのうち食料は週1回運ばれてくるのみで

す。港がないため船の就航率も悪く、東京に出ようとしても天気によっては島から出る手段がなくなってしまう。信じられませんよね？この島で暮らしていると自然の力を肌で感じます。

それでも、開発を拒み自然を残そうするのはなぜでしょう？私も、これについては島の方々によくお話を聞いていて、まだまだ勉強中です。あえて言うならば御蔵島の人々は、島の歴史をとて愛しており、その歴史の中で自然は欠かせないものだったからだと思います。この自然があったからこそ人口300人弱でも生きてこられたのではないのでしょうか。現在、夏はイルカを見るために観光客が訪れます。収入源となるため島の方たちも民宿を営んでいますが、根本的には島を観光地化

したいという考えは少ないように思います。それは、観光地化が進むほど自然が崩れていくからです。私は教員として仕事をするために御蔵島に住んでいますが、自然を守ることが当たり前になっているこの島から学ぶことはまだまだあると思っています。

最後に余談です。島での私の生活は→毎日のように島の方においしい野菜や魚を頂いています。夕飯は近所にお邪魔して食べさせてもらい、時間があればかわいい子どもたちと一緒に遊んでおります。大きな虫や蛇にも少しずつ慣れてきました。是非皆さんにも一度訪れていただきたい場所です。

---

## OBOG ネットワークを生かして ～埼玉県 IYEO 主催の事前研修会を通して～

事前研修会実行委員長 植竹 佑樹

(2002年「国際青年育成交流」タンザニア派遣参加青年)

7月12日。今年度派遣される青年の埼玉 IYEO による事前研修会の日であった。派遣国から帰国して早1年という懐かしさを感じながら、様々な準備を行ってきた。約1か月に1度のミーティングを重ねてきた。「いかに、今年度の派遣青年に楽しんでもらうか？」「いかに、国際交流について楽しみながら考えてもらうか？」を念頭においてミーティングを重ねるうちに、少しずつ事前研修会のプログラムが出来上がってきた。

当日は、結果として今年度の事業参加者と OBOG 含めて20人近くの人に参加していただけた。

自己紹介ゲーム・名前当てビンゴゲームを通して参加者同士のアイスブレイキングをはかった。その後、「自分たちが国際交流団体を立ち上げるなら何をするか」をテーマに、今年度参加青年と OBOG でグループ分けをしたうえで話し合った。外国人との交流カフェ、フリーマーケットなど、OBOG の視点からではなかなか浮かばないような意見が出て、非常に興味深い討論であった。このテーマは、一見すると抽象的であったが、今後の事後活動の具体例を参加者全員で共有できたわけで、今後の活動における大きな指針とすることができたのではないかと思う。



今年は、OBOG の多くの方の手伝いをいただいた為、非常に内容の濃いプログラムを作り上げられたと思う。埼玉 IYEO の底力を実感できたイベントであった。私自身、初めてお会いする方が多かったが、OBOG の方々から様々な刺激を受けた。OBOG のネットワークを生かし、今後も様々な

企画を立案・実行していきたい。今までは IYEO 関係者向けのイベントが多かったが、今後は埼玉県民の方々をも巻き込んだ国際交流イベントを実現したい。そして、将来的には、埼玉 IYEO 主催のイベントが、多くの国際交流に興味を持つ人々にとっての意見交換の場にしていきたい。



## 都道府県 IYEO からのお知らせ



### 《奈良県 IYEO からのお知らせ》

「IYEO 奈良メーリングリスト」を立ち上げました。今後、速報性が必要な情報はメーリングリストで流します。参加希望の方は [kita3104@m4.kcn.ne.jp](mailto:kita3104@m4.kcn.ne.jp) まで連絡ください。ML アドレスは [iyeo-nara@freeml.com](mailto:iyeo-nara@freeml.com) ですが、登録者しか投稿閲覧できません。 (IYEO 奈良 会長 喜多 聡)

### 《広島県 IYEO からのお知らせ》

今年度は、広島県で内閣府の日本・韓国青年親善交流事業の受入れを行います。広島県でのプログラムの中心はホームステイになります。(滞在日程：11月14日～17日)

つきましては、韓国青年ホームステイ受け入れ家庭を大募集します！

ホームステイ受入れ日程：11月14日～16日〔2泊3日〕

お申込・お問合せ先：実行委員長 奥野までお願いします。 電話 090-2802-2388

eメール [okntty@go2.enjoy.ne.jp](mailto:okntty@go2.enjoy.ne.jp)

### 《三重県 IYEO からのお知らせ》

三重県にて開催される今年の東海ブロック大会は、世界遺産登録が進められている熊野古道をテーマに『地域の活性化と国際交流』を考えます。夕食には松阪牛、2日目には古道散策と三重の良さを満喫できる、とてもお手頃でとても実になるこのブロック大会、是非皆さんふるってご参加下さい。

と き：9月27日(土)・28日(日)

ところ：三重県松阪市グリーンホテル

参加費：10,000円(小学生以下5,000円)・日帰り参加 4,500円

※参加申込等お問い合わせは、東海ブロック大会実行委員長 小野田祐一 (090-4468-6739 又は [yuichi-onoda@k7.dion.ne.jp](mailto:yuichi-onoda@k7.dion.ne.jp)) までお願いいたします。

## 日本青年国際交流機構第19回全国大会兵庫大会実行委員会より

今回の全国大会は、近畿ブロックが力を合わせ神戸は明石海峡大橋の袂、舞子の地で開催いたします。皆様ご存知のように古に遡れば難波津に始まり源平の時代以来、神戸を中心とした港エリアは海外との交易、文化交流の源流の地でもあります。この地は、1995年未曾有の大震災に見舞われ大きな被害を受けましたが、全国のIYEO関係の方々、さらに世界各地の内閣府事業参加者から多くの励ましを得ることができ本当に感謝いたしております。大震災の後、様々な復興への取り組みにより、正に国際都市神戸がよみがえっております。この機会に直接ご覧頂ければと存じます。復興への取り組みには様々なドラマがありました。そして、国際都市神戸であったが故の多くの異文化への気づきや交流もまたあったのです。

今回の大会は皆様への感謝と、復興活動から得られた国際交流への視点をご参加いただく皆様と分かち合いたいとの想いで、企画を進めております。ご期待下さい。そして一人でも多くのご参加をお待ちいたしております。

## 青少年国際交流事業事後活動推進大会 日本青年国際交流機構第19回全国大会 第10回青少年国際交流全国フォーラム 兵庫大会

1. 目的 内閣府、地方公共団体等の行う青少年国際交流事業の既参加青年が集まり、地域における事後活動の推進状況を報告するとともに、全国的な事後活動を更に充実させるための方策について積極的に意見交換を行い、既参加青年相互の交流と研さんを図り、今後の国際交流活動及び地域社会における諸活動の推進に貢献するとともに、国際交流活動を一般の方にも紹介していくことを目的とする。
2. 主催 内閣府政策統括官（総合企画調整担当）（財）青少年国際交流推進センター  
日本青年国際交流機構 兵庫県青年国際交流機構
3. 後援 兵庫県（予定）、神戸市（予定）、（財）兵庫県青少年本部（予定）
4. 主管 日本青年国際交流機構第19回全国大会兵庫大会実行委員会
5. 期日 平成15年11月8日（土）～9日（日）

## 6. プログラム

## 第1日目 11月8日（土）

- |             |      |  |
|-------------|------|--|
| 12:30～      | 受付   |  |
| 13:30～14:00 | 開会式  |  |
| 14:15～15:45 | 基調講演 | テーマ：「被災地に生まれた多文化共生の意識」<br>講師：兵庫県副知事 齋藤 富雄氏 |

- 16：00～17：30 テーマ別分科会及び文化交流会  
 並行して兵庫県及び全国の国際交流活動及びボランティア活動展示)
- 18：00～ チェックイン
- 19：00～21：00 歓迎交流会

\*基調講演に齋藤兵庫県副知事をお迎えします。齋藤副知事は、震災復興の正に陣頭指揮を担われました。

\*分科会では兵庫在住のIYEO会員からで、国際経済、国際ジャーナリズムのそれぞれの分野で御活躍の方などをお迎えして語り合う場作りをします。全体会場である「あじさいホール」では、日頃より交流のある世界各地の舞台芸術を神戸ならではの企画で楽しんでいただきます。

\*歓迎交流会は神戸ならではのパフォーマンスも含め、参加いただいた皆様と十分に交流できるように企画を進めております。

## 第2日目 11月9日(日)

\*11月9日(日)は、近畿ブロックの近年の事業参加者を中心に、体験をもとにして「私たちにできること」「新しいアイデアで始めてみたい国際交流活動」などについて語り合えればと考えております。

- 9：00～10：00 日本青年国際交流機構活動報告
- 10：00～10：20 閉会式
- 10：30～ オブショナルツアー（兵庫県内）

## 7. 会場

シーサイドホテル「舞子ヒラ神戸」

〒655-0047 兵庫県神戸市垂水区東舞子町18-11

TEL：078-706-3711 FAX：078-706-2212

## 8. 対象者

内閣府、地方公共団体などが実施した青少年国際交流事業の既参加青年  
 国際交流活動に関心のある方

## 9. 参加費

社会人 16,000円（非宿泊は8,000円）  
 高校生以上の学生 13,000円（非宿泊は6,000円）  
 中学生以下 10,000円（非宿泊は5,000円）  
 フォーラムだけの参加者 1,000円（会員のみ、一般は無料）  
 （食事・ベッド不要の幼児は無料）

## 10. 参加申込方法

同封の参加申込用紙に必要事項を記入の上、参加費のみお振込み下さい。銀行振込をご利用の方は、官製はがきに、振込日及び参加代表者氏名、住所、参加事業・年度、オブショナルツアーの希望コース名同行参加者氏名など必要事項を記載して大会事務局にお送り下さい。

（次ページへ続く）

11. 参加申込先 郵便振替口座番号：00940-2-249865（手数料当方負担）  
口座名称：日本青年国際交流機構第19回全国大会  
銀行振込口座番号：三井住友銀行垂水支店 普通口座 5461754  
口座名称：兵庫県青年国際交流機構（手数料皆様負担）  
〈申込締切日：10月27日（月）郵便振替送金日消印及び銀行振込日有効〉

## オプションツアーについて

- ① 神戸港周遊と南京町、北野異人館めぐり（定員50名、引率あり）⇒神戸市所有港務艇「おおわだ2」にメリケンパークから乗船し、1時間弱の港内周遊（無料）のあと、その後、各自で南京町、北野異人館等を散策していただくコースです。
- ② HAT神戸（まやウォーターフロント）⇒（阪神淡路大震災記念「人と防災未来センター」  
<http://www.dri.ne.jp> 見学と兵庫県立美術館「アレクサンドロス大王と東西文明の交流展」  
<http://www.artm.pref.hyogo.jp/exhibition/index.html> 鑑賞）（20名以上の場合、引率あり。）
- ③ 世界文化遺産姫路城と姫路武蔵館見学（フリー）⇒新快速で宮本武蔵ゆかりの姫路へ。国宝姫路城、武蔵の肖像画のある兵庫県立歴史博物館、武蔵直筆の達磨図のある姫路武蔵館等を自由に見学。
- ④ 淡路島国際公園都市「淡路夢舞台」<http://www.yumebutai.co.jp/>（フリー）⇒高速舞子から直通バス約20分で淡路夢舞台へ。淡路花博会場であった公園の散策、あのベッカム様が泊まった、ウェスティンホテルでのティータイム等、自由にお楽しみください。

## 編集後記

夏でないような季節が過ぎて、なぜか残暑は厳しい今日この頃。皆さん、お元気ですか。9月2日に、第30回「東南アジア青年の船」が出航し

10月14日には日本に帰国して国内プログラムです。9月下旬はルネッサンス青年リーダー招へい、11月は韓国、中国の招へいと、交流の秋本番です。

\*本誌の年間講読をご希望の方は、(財)青少年国際交流推進センターまで葉書又はFAXにてお申込み下さい。年間講読料は1,500円です。

MACROCOSM（マクロコズム） 9月号 Vol.54 2003年9月1日発行（隔月発行）	
編集：マクロコズム編集委員会	編集協力：内閣府政策統括官 （総合企画調整担当）
発行：財団法人 青少年国際交流推進センター	日本青年国際交流機構
〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-35-14	定価：198円（本体189円）
TEL 03-3249-0767	印刷所：株式会社 絢文社
FAX 03-3639-2436	TEL 03-3959-3960
e-mail <a href="mailto:hq@iyeo.or.jp">hq@iyeo.or.jp</a>	
URL <a href="http://www.centerye.org">http://www.centerye.org</a>	
<a href="http://www.iyeo.or.jp">http://www.iyeo.or.jp</a> (IYEO)	

課題別視察（7月17日）

東京プログラムの主なプログラムの一つとして実施されたもので、討議セッションへの分野別コースに対して導入の役割を持たせるために、同じ6分野に分けて行われました。

（環境コース）



▲ 特定非営利活動法人「畑の教室大泉風のがっこう」



（国際協力コース）



▲ 特定非営利活動法人  
日本国連HCR協会への訪問



（情報コース）

▲ 読売新聞東京本社にて見学  
と懇談



国際青年育成交流」事業（招へい）



▲ 新宿区立戸塚第三小学校

（教育コース）



（伝統文化コース）

（ボランティア活動コース）



井の頭自然文化園 ▲



▼ 歌舞伎座にて



1973年2月14日。一隻の大型客船が横浜を出航しました。歴史的な日本初の世界一周クルーズへの出発です。それが、初代「にっぽん丸」。現在の「にっぽん丸」はそれから数えて3代目です。この間、私たちは、日本のクルーズの先駆者として、新しいクルーズや様々なサービスを開発してきました。例えば、日本船初めての展望浴場などは、ほんの一例。また、私たちの長い経験の集大成である独自の船内プログラムが、他の日本客船全てのお手本になっていたりもします。ところで豪華客船でのクルーズと言うと、リタイア後の老夫婦がのんびりと旅をされているイメージをお持ちではないでしょうか。でも、「にっぽん丸」に乗船してこられるお客様は、驚く程アクティブな方が多いのです。いや、アクティブになられると言った方が正しいのかもしれませんが。これまでの人生になかった新しい体験を、船の上で得た新しい仲間達と一緒に貪欲に吸収されるのです。自ら進んで何か新しいものを得ようとする気持ちを冒険と言うとすれば、冒険には年齢や性別なんて関係ない、私たちは、そんな皆さんの想いを満足させることを一番大切に考えています。そして私たち自身も、お客様に負けなくらいに、いつも新しい事に挑戦して行こうと思っています。これまでも、ずっとそうして来たように。

冒険する生活を選びました。

冒険する生活  
にっぽん丸



にっぽん丸は、米国公衆衛生局 (USPH) による船舶衛生検査において、3年連続で日本船最高得点を獲得しました。

クルーズデスク フリーダイヤル  
0120-791-211



商船三井客船

<http://www.mopas.co.jp>

美しい時代へ — 東急グループ



旅も楽しめる合宿にしたい。



急に1週間の全国出張になった。

## ひとりひとりに、満点旅行。

ONE  
to  
ONE



家族水入らずで楽しめるプランを。



北から南まで温泉三昧したい。

商品力、サービス力、情報力、3つのパワーで、  
あなたの旅をさらに快適に。

どんな旅でも、東急観光はすべてのお客様に満足  
していただきたいと願っています。そのために、オリ  
ジナル旅行や団体旅行など、多彩な商品をご用意。  
IT活用による最新情報入手から24時間予約まで、  
リアルタイムな体制でお応えします。そして旅を熟知  
した私たちのひとりひとりが、お客様の旅を親身に  
なって考えます。



国土交通大臣登録旅行業第38号  
日本旅行業協会正会員・ボンド保証会員  
〒153-8550 東京都目黒区東山3丁目8番1号  
<http://www.tokyukanko.com>  
<http://tour.tokyu.com>